

金
峰
山

山
口
耀
文



金峰の頂上に着いたのは夕方だった。増富温泉から本谷川沿いの里道を歩いて、金山部落、富士見平、大日岩とお定まりのコースを登ってきたのだが、稜線に残雪があらわれて頂上がまぢかに仰がれるあたりから、みなの方がそろわなくなった。一行は十一人。山の会の新人訓練を目的にした山行で、雲取山までのいわゆる奥秩父の主稜を縦走するために担いだ、幕営用具やら食用やらの荷物が重かった。

さて、そうやって頂上にたどり着いたものの、着くと同時に空がぶきみに暗くなつて、小雨を含んだ冷たい風がいきなり激しく吹き出した。大急ぎで五丈石の基部に二つのテントを張り、その中で風音の騒がしい夜を迎えた。

翌日は、甲武信岳までの長い縦走をひかえているので、朝早くに頂上を出発。

結局、このときの金峰山には、あまり上等な思い出は残っていない。五丈石の下で迎えた風の夜の印象ばかり強いのである。

奥秩父山塊は二〇〇〇メートルから二五〇〇メートルくらいの山々が連なつて、やたらと広いが、概してじぶんの存在を誇示するような立派な容姿をもつ山は少ない。

遠望すると、どれも同じような鈍頂の峰がうねうねと並んで、どれが何山なのかを判定するのがむずかしい。そんななかで、ひとり金峰だけは頂上に一点、五丈石をとがらせているせいで、遠くからでも、あれが金峰、と指さすことができる。

森林に覆われて、もっさりした山が多い奥秩父でも、金峰だけは「華」がある。そんな気がするのは、ひろびろとした頂上と、そこに立つ五丈石のおかげだろう。

前記の山行から三十五年ちかく経って、あのとときにリーダーをつとめた仲間と二人で、私はまた金峰山に出かけた。前回は金峰の三分の一ぐらしか味わえなかったような気がするから、こんどは存分にこの山を味わってやろう——と、そんな期待があった。

前回とおなじく増富から歩きだし、しかしこんどは冬山なので途中の大日小屋（無人）に一泊して、二日目の正午ごろ頂上に立った。冴えた青空のひろがる四周の展望はすばらしく、ことに白い南アルプスと八ヶ岳の眺めが見事だったのだが、ただ遺憾なことに、このときも頂上は風がひどかった。からだがガチガチになってしまいそう

な猛烈な風で、たどり着いた頂上での憩いのひととき——どころではなかった。その冷酷な風に追いついて立てられて、雪原の斜面の下に見える小屋まで下り、その軒下でひと休みしてから、雪の深い森林帯を西股沢に下って、雪の河原にテントを張った。

翌日、谷筋の道を川端下まで歩いてこの山行を終えたのだが、またしても頂上で風に叩かれる金峰山になってしまった。

私には、いまでも金峰には残された楽しみがある。それは、あの五丈石の上で青空に気ままな夢を遊ばせること。思えば幸いなことに、私はまだ五丈石には登っていない。春でもいいし、秋でもいい。太陽がぼかぼかと暖かな真昼、あの頂上の岩の上で好きな時が過ぎせたら、そのときはじめて金峰は、私の山になるだろう。